

第 2 章	近隣地域住民の和歌山市での消費動向	小川
第 3 部	第 3 章 消費者の買物金額変化の規定因	柳
	第 4 章 消費動向分析	木下
第 4 部	第 5 章 和歌山市小売商業の課題	木下
	第 6 章 和歌山市小売商業の今後の方向性（提言）	木下

#### 【研究会・活動】

研究会を 9 回開催（うち、プレ研究会 1 回）。



### 「和歌山市における市場（いちば）活性化についての研究」終了報告

和歌山市・市場活性化研究会

主査 鈴木 裕範

[和歌山大学経済学部 准教授]

小売市場は、永く市民のもっとも身近な所にある、まさに「市民の台所」であった。都市における人間の営み、暮らしの場であり、市場という空間が創造するコミュニティがあった。小売市場から、そのまち、その地域が見えるのは、そうした理由による。ところが、今日全国のいたるところで多くの市場が苦闘し、消滅の瀬戸際に立たされている。背景にあるのは、社会経済情勢の変化、国民の消費行動やライフスタイルの多様化、価値観の変化である。地域社会において、小売市場の存在価値は低下し、和歌山市でも客足が遠のきひっそりとした風景が広がっている。

市場の変貌は、単に市場、市場関係者の問題なのか。これは都市と地域社会の問題である。和歌山市・市場活性化研究会は、そうした立場に立ち、和歌山市における市場活性化の可能性と課題を明らかにし、まちづくりに活かしていくことを目的に、平成 21 年度自主研究会として 5 月 8 日にスタートした。

研究会では、毎月例会を開催し議論を深め合ってきた。そしてこの間、和歌山市の七曲市場商店街協同組合、明光商店街協同組合、和歌山駅前卸小売商店街でヒアリングやアンケートを実施する一方、地元住民や観光客に人気の元気な市場として注目されている石川県金沢市「近江町市場」、滋賀県彦根市「四番町スクエア」、兵庫県明石市「魚の棚（うおんたな）商店街」、長崎市「新大工町市場」の 4 つの市場（商店街）関係者、行政の担当者ら多くの人たちにインタビューをした。

その結果、市場が持つ信頼・信用に根ざした対面販売という特性だけではなく、市場の多様な価値や多面的な機能に目を向けていくことの重要性が確認された。それらは、中心市街地の空洞化・再生が喫緊の課題として地域にのしかかり、住民の少子高齢化によってまちそのものが老いていく現在という時代だからこそ、新たな価値をもつ可能性がある。

報告書では、再生・活性化の基本方向として地産地消型流通システムの構築や人材育成、

魅力づくりと情報発信の必要性とともに、市場を人と人、人と地域をつなぐ新たなコミュニティとして構築し、まちづくりの観点から位置付け直す必要性を指摘している。

研究会では、「研究が一過性のものにならないように、成果物をしかるべきところにフィードバックして実行につなげるようにする」「調査だけでなく、市場が内発的な力で展開できる創造的な場面づくり、現実的な立場で実行できるようにする」のが重要であることを強調しておきたい。

報告書は、「実行する」ことの重要性にかんがみ、市場再生に向けたアクションプログラムを提案している。理念は、市場の自主・自立と連携・協同の仕組みづくりによる持続的な発展とコミュニティの拠点としての整備である。それには、まず市場、商店主、市民、行政、大学関係者等から成る「〇〇市場再生戦略プロジェクトチーム」の立ち上げが求められる。様々な立場の人が市場を語る「和歌山から、市場再生」フォーラム、町なか歩きとしての市場ウォッチングも考えられる。「そうだ、市場に行こう」運動を提唱したい。市民の暮らしと関わりが深い市場が元気な町は、魅力的なまちであることは間違いない。

#### 【メンバー】

(主査)鈴木 裕範	和歌山大学経済学部准教授
大西 敏夫	和歌山大学経済学部教授
高橋 淳子	和歌山大学大学院経済学研究科修士課程
山本 敦子	和歌山大学経済学部助教
澤崎 喜英	財団法人和歌山社会経済研究所研究部長
谷 奈々	財団法人和歌山社会経済研究所主任研究員
石橋 宏之	財団法人和歌山社会経済研究所研究員
畑 光穂	和歌山商工会議所企画・街づくり支援室リーダー
藤村 幸司	和歌山商工会議所企画・街づくり支援室主事

(注：メンバーの所属・肩書きについては平成 21 年度時点)

#### 【執筆担当】

まえがき .....	(鈴木)
第 1 章 市場の発展と歴史 .....	(谷)
第 2 章 和歌山市における市場の繁栄と変貌 .....	(澤崎)
第 3 章 和歌山市の市場における現状調査 .....	(石橋)
第 4 章 市場が作り出す地域活性化	
1～2 .....	(高橋)
3～4 .....	(山本)
第 5 章 和歌山市における市場活性化とその可能性	
1～2 .....	(大西)
3 .....	(鈴木)
おわりに .....	(大西)

## 【研究会・活動】

研究会を 10 回開催（うち 4 回は、七曲市場、明光市場、和歌山市役所、和歌山市中央卸売市場にて現地ヒアリング調査を実施）。

金沢市「近江町市場」、彦根市「四番町スクエア」、明石市「魚の棚市場」、長崎市「新大工町市場」に現地視察。



## 「観光客の受け入れに対する和歌山県民の意識調査」終了報告

おもてなし研究会

主査 竹田 明弘

[和歌山大学観光学部 准教授]

本研究会は、昨年度まで実施されていたホスピタリティ研究会を引き継ぐ形で発足した。ホスピタリティ研究会では、和歌山県の観光がさらなる発展をとげるために、宿泊産業やアミューズメントだけでなく、地域住民の観光客の受入意識を高める事が必要であるという結論にいたった。

ところで、2008 年から 2017 年の和歌山県長期総合計画は、「未来に羽ばたく愛着ある郷土 元気な和歌山」をビジョンとして 4 つの活動目標をあげている。1. 和歌山県民は、郷土和歌山に深い愛着を持ち、元気にいきいきと暮らしています。2. 温暖な気候や豊かな自然、さらには癒しの力・安らぎの空間が住む人に満足感を与え、安全で安心できる和歌山で暮らしています。3. 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」をはじめとする和歌山の優れた魅力が世界に向けて発信され、国内外から多くの人々が和歌山に訪れ、その素晴らしさを体験しています。4. 県民や県内産業は、古くから受け継がれてきた進取の気性を発揮して、これまで以上に多くの人々を和歌山に引きつれるとともに、世界を視野に入れて活躍しています。これをみると、地域住民が満足して暮らす街、地域外部から観光客などが多く訪れる街が両輪になっている。まさに、「住んでよし、訪れてよし」の街を目指したものといえよう。

そこで、本研究では、地域満足（住んでよし）と受入意識（訪れてよし）を同時に充足できるような地域政策とは何かについて提言することを目的として、住民の他者受入意識に影響を与える要因について調査した。

調査は質問票調査の手法を用いた。調査地域は、県庁所在地であり、和歌山城や紀三井寺など観光資源も豊富な和歌山市、温泉やリゾートなど県内最大の観光地である白浜地域、近年において観光への積極的な取り組みがみられる湯浅町の 3 地域とした。調査は当該地域に居住する住民に対しランダムに質問紙を配布し、後日郵送にて回収するという方法をとった。なお、質問紙は 1500 部配布され、回収は 508(33.9%)であった。調査項目としては、地域満足、近隣関係、地域に対するコミットメント、観光に対する期待や思い、受入